



リアルすごろく説明の様子

### ❖沿革

豊川市の諏訪地区は、「空襲による甚大な被害から復興を遂げたまち」である。当時、東洋一といわれた豊川海軍工廠がこの地には有り、広さは約60万坪にも及び、そこを起点として周辺地域の開発が進み発展したまちである。しかし、海軍工廠が太平洋戦争末期に空襲を受け、この地域も壊滅的打撃を受けた。

戦後の復興に大いなる役割を果たしたのが、当地域の商業者たちであり、商売を通じてまちの復興に寄与するとともに、早くから一致団結して発展を続けた。

やがて、行政主導の企業誘致活動により、海軍工廠の跡地一帯が工業団地として生まれ変わり、それに伴い人口も増えていく中、昭和38年に形成されたのが諏訪地区商店街である。そして、昭和40年代に入ると、昼夜を問わずお客がひっきりなしに訪れる商店街にまで成長し全盛期を迎えることとなった。

その後は、時代とともに衰退していったため、平成元年に市街地再開発事業によって建設された商店街の核となる商業ビル「プリオ」が誕生した。その結果、市外に流出していた客足が一時戻ってきていた。

しかし、近年、郊外への大型ショッピングセンターの進出等による影響で、「プリオ」のキーテナントの撤退や、「すわポン商店会」の前身である商店街振興組合の解散など当該地区を取り巻く状況は大変厳しいものとなっている。

そのような状況の中、今は新しい風が吹き始めている。解散した商店街の青年部が中心となり、「諏訪地区活性化実行委員会」を立ち上げ、平成25年9月から現在の「すわポン商店会」として活動を始めた。以下では、諏訪地区商店街の特性を生かした「すわポン商店会」の2つの取組をご紹介します。



諏訪地区商店街の様子

### ❖商店街を取り巻く環境

諏訪地区商店街は、豊川市役所の最寄り駅である名鉄諏訪町駅の北側に位置し、「すわポン商店会」と「プリオテナント会」の二つの組織から成り立っている。この地域の多くを占めているのが工業団地であるため、日常における人の出入りは特に多くはない、そのため商店街には人を呼び込むための創意工夫をこらしたイベント等の実施が必要となっている。

当商店街の特徴は、例えば、一般的な商店街と言うと商店街の通りにアーケードがあって、通りに店と店が軒を連ねて“線的に広がっている”のを思い浮かべるが、ここは商店街が通りと一体になっておらず、アーケードも存在しない。“面的に広がっている”地域であり、実施されるイベントもその特徴を活かしたものとなっている。

### ❖取組を開始したきっかけ

諏訪地区は、商店街振興組合が中心となり、様々なイベントを企画・運営するなど、まちづくり活動を担ってきた。3年ほど前からは、中部大学と連携し、空き店舗を活用してまちづくりの実験の場「まちDENラボ」を開設した。その中で地区のキャラクターを公募し、狸の「すわポン」も誕生した。その後、商店街振興組合は解散したが、引き続きやる気のある若手商店主たちが「まちDENラボ」に集い、商店街の活性化について知恵を出し合うなどの勉強会を続けた。それが「すわポン商店会」の結成のきっかけとなり、商店街振興組合の後を引継ぎ、まちづくり活動の中心となってイベントの舵をとっている。そのイベントが、「リアルすごろく」や「すわポンマネー」だ。



空き店舗を活用した「まちDENラボ」

### 取組

## リアルすごろく



### 取組の概要 >>>>

「リアルすごろく」は諏訪地区商店街を一つの大きなすごろく盤とみなし、店舗や施設をすごろくのマスに見立てるという大胆な発想が生んだ、面的に広い当商店街ならではのイベントである。

参加者は、まず受付会場に集まり、そこで当商店街を象ったすごろくの台紙を貰う。すごろくの1つ1つのマス目が、商店街の様々な店舗に対応しているのだ。サイコロを振った目に応じ、参加者は対応する店舗に赴き、向かった先の各店舗で、様々なイベントを体験する。

例えば、お肉屋さんでは大型冷蔵庫でマイナス30度の世界を体験したり、市立図書館では、一般の利用者が見学できない地下書庫の見学をしたりしている。また、店舗によってはプレゼントが貰えることもある。1つのイベントが終わったら、またサイコロを振り、次の店舗へと行く。それを繰り返し、ゴールを目指すという内容だ。

参加者は主に家族連れで、当初300人ほどの参加者を想定していたが、当日は1,000人近い人が集まり、参加用の台紙が足りなくなり一部の方に参加をお断りする事態が起きたほどで、参加者側と店舗側の双方から大変好評であった。



▲リアルすごろくのチラシ

▶リアルすごろく時に  
使用できる  
すわポンチップ